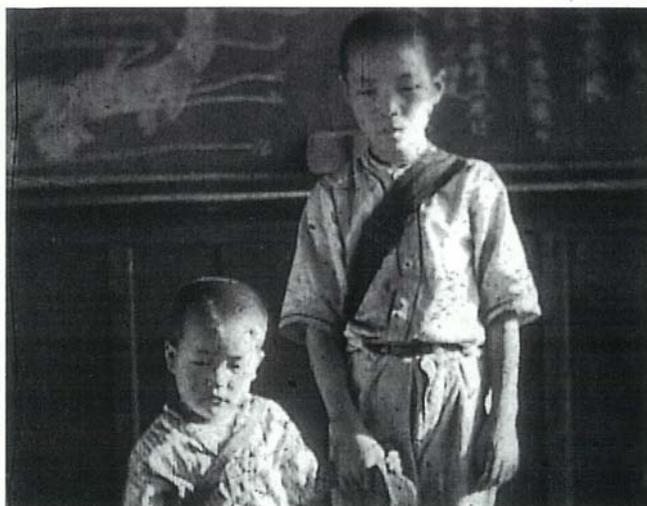


非常時の少年たち (2)

——— 映画『僕らの弟』をめぐって ———

太 田 米 男



高瀬房一（右）と弟 信一。(映画「非常時涙の少年」の一場面)

非常時涙の少年

映画『僕らの弟』の発見で始まったこの調査は、意外な展開を見せた。現地調査の過程で、『僕らの弟』という劇映画の他に、同じ題材のドキュメンタリー映画『母なき家の母』という全く別の映画があることが分かってきた。劇壁画の『僕らの弟』と記録映画の『母なき家の母』。その記録映画には、四貫島に住む当の本人たちが登場しているという。これは大変な発見である。

しかし、当時の雑誌や資料類を調べ、映画検閲時報を探しても『母なき家の母』のタイトルは、結局見つからなかった。

映画検閲時報によれば、『母なき家の母』は存在せず、その記録映画に該当するであろうものは、やはり『非常時涙の少年』であるらしい。

映画検閲時報の検閲番号 H. 9, 883 号の『非常時涙の少年』は、大阪毎日新聞社によって製作され、昭和 8 年 (1933 年) 9 月 11 日に申請されている。

映画『僕らの弟』の副題となっていた《非常時涙の少年》が、実は大阪毎日新聞社自身が製作した全く別の映画であり、この『僕らの弟』と『非常時涙の少年』の二つの映画は、タイトルからして、きっと同じ題材のものであろうと推察することが出来る。

映画『僕らの弟』に、何時の間にか《非常時涙の少年》という副題が付くようになったのは、文部省による非常時政策に便乗したものではなく、当時の人たちには『僕らの弟』よりも『非常時涙の少年』の方が、一般によく知られた名称だったのだろう。

原作となった四貫島小学校の子供たちの物語は、新聞に載り、その記事によって劇映画にもなった。また新聞社自らが作った記録映画が同じ題材のものなら、それほど話題になる記事が、コラムの片隅に載ったような小さなものではなかった筈である。

この映画のモデルとなった紀積(きのつもる)先生は、映画の内容や登場人物における、すべての経緯を知って居られる筈である。直接お聞きする以外に、この全貌は明らかにはならない。

此花の郷土史研究会の高橋弘さんに連れられて、豊中市にある紀先生のお宅を訪ねた。紀先生は 96 歳の高齢で、お会いすることもお話を聞くことは出来なかった。ただ、奥様の雪子夫人とは僅かな時間だったが、お会いすることが出来た。

雪子夫人は、旧姓安藤雪子。四貫島小学校時代に紀積

と職場結婚。これらの映画の題材となった記憶も鮮明に覚えておられた。青春の一時期、それも映画にもなった晴れがましい一時の思い出は、風化するどころか、輝きのある青春の一ページとして、より鮮烈な印象を残すものである。

その数少ない証言によって分かったことは、映画『僕らの弟』の物語となった題材は、四貫島小学校で実際にあった出来事を新聞が採り上げ、すぐに映画にもなった。日活の映画では、紀先生の役を当時の大スターであった南部彰三が演じ、もう一本の映画がやはり『非常時涙の少年』という題名で、大阪毎日新聞社が製作。この記事を書いた記者自身が構成を行なっている。紀先生自らが出演した記録映画であることも確認できた。

この『非常時涙の少年』は、学校や地域の映学会だけでなく、松竹系でも一般に公開されたという。

何よりの吉報は、この映画フィルムも、家のどこかにある筈だという。もし、このフィルムが発見されれば、劇映画『僕らの弟』だけでは証明できなかった《非常時》と呼ばれた時代の証言者として、格好の題材になる。

新聞の記事から、映画になり、また新聞社自らが映画を作っている。この出来事が、当時の人たちに大きな印象を与えたことは間違いない。

スリリングな思いで、その映画との出会いの時を待つことになった。ただ、胸のどこかに引っ掛かる気掛かりな事もない訳ではなかった。映画のモデルとなった高瀬兄弟の消息についてである。新聞に取り上げられ、映画にもなった高瀬兄弟の消息は、雪子夫人や家族の方たちにも、全く分からないということだった。今、何処で何をして居られることか。戦争という深い暗黒の時期を通り過ぎる過程で、音信も途絶えたままになったという。

不幸にも母を亡くし、父親は出稼ぎに出て、子供たちだけが取り残された日常の中で、日々に追われた生活が、全国的な新聞に載り、映画にもなった。一夜にして、三人の子供たちは小さな英雄のように話題になり、持て囃された。過分な扱いにより激変する生活の中で、小さな少年たちは何を感じ、何を考えていたのか。

昭和の初頭に、小学生だった子供たちにとって、時代は苛酷な展開を見せる。日中戦争から太平洋戦争への大

きなうねりの中に飲み込まれ、何ら主張も出来ず、時代の流れの中に翻弄された世代である。高瀬房一を演じた中村英雄のように、見知らぬ異国の地で命を落としているかもしれない。日本が戦争へと向かう時代に青春を迎え、多くが戦場で命を落として行った、特攻隊として露と消えた、その世代でもある。

映像というメディアが、軍国時代に教育という名の元で、如何なるアジェンダを行なってきたのか。もう一つの映画『非常時涙の少年』が証言するかもしれない。

この映画の調査が、忘れられた時間をプレイ・バックするだけではなく、もしかすると報道メディアや教育の功罪についての問題が浮かび上がり、その全貌が明らかになることで、特定の人たちを傷つけることになるのかもしれない。何か、そのような心の中に一縷の不安を持ちながらも、そのフィルムの発見を待つことになった。

四貫島千鳥橋界限

この映画の舞台となった此花区四貫島は、阪神電鉄西大阪線（通称、伝法線）の走る千鳥橋駅を中心とした大阪湾湾地帯に位置している。紡績や硝子、造船などの操業が、明治初期に始まり、大阪北港の工業地帯に隣接した地域として、千鳥橋界限は活気に満ちた街であった。今日では、当時の活況を想像する以外にないが、昭和初頭の不況をもろに被りながらも、戦時にかけて造船、鉄鋼などの大阪工業地帯隣接の中心地となって、5、6軒の映画館も有した一大歓楽街として発展し栄えていた。

このあたりを郷土史の会報《なるみ会》（昭和55年1月1日発行）「ちどりで歩いた千鳥橋」（高橋弘）では、「…東洋紡績の、通勤時には、牛乳配達の前自転車が通りにくい程だったそうで、千鳥橋筋がいちばん栄えたのは、大正10年頃から昭和11年の、支那事変迄、大売出しの、のぼりが立ち、紡績の女工さん達でムシムシしていたと言う。……朝日橋詰から千鳥橋。北側は正蓮寺川迄全部が東洋紡績の工場、市電は兼平町迄だった。市電が来たのが大正末期、間もなく、阪神の伝法線が開通して、千鳥橋は全盛期を迎えた…」と記されている。

この四貫島、伝法、梅香界限は、新淀川と安治川との

中州となっている。湾口地域にユニバーサル・スタジオ・ジャパンが建設されることで、再び注目を集めている土地でもある。

この地域は、度重なる淀川の洪水にさらされ、大きな被害が絶えなかった。元々淀川は、毛馬・長柄辺りから天満にかけて大きく迂回し、寝屋川と合流しながら、中之島となる堂島川と土佐堀川に別れ、再び合流して安治川となって大阪港に流れこんでいる。洪水ともなれば、必ずと言って良いくらいに、毛馬・長柄辺りで決壊した。そこで明治31年（1898年）4月から、長柄辺りから直接大阪港に流れこむ新淀川河川敷の大工事が始まった。明治42年に完成し、高見町は西淀川区の飛地となった。

映画での、西淀川区高見町と此花区四貫島は隣合わせながら、行政的には異なったものであった。この不自然な区画に対して、昭和17年7月に大阪23区の区画整理が行われ、高見町は正式に此花区に編入されて今日に至っている。

映画の当時、高見町は行政区としては西淀川区に属していたが、小学校区としては、今日高見町には高見小学校がある。高瀬少年はその高見町から遠い四貫島の小学校へ越境通学していたことになる。

この調査を難しくしているものは、時の流れだけではない。何よりも高瀬房一少年の家族が、二階借りの住人であったということにある。日雇い労務や出稼ぎなどの貧しい家庭は、職探しのために住居も転々とするが多かった。だから、同級生とは言っても、地域も異なり、

休み勝な高瀬少年には親しい友達も少なかった。だから、四貫島の郷土史を調べる高橋弘さんに尋ねても、あまり芳しい返答がないのには、このような事情があった。

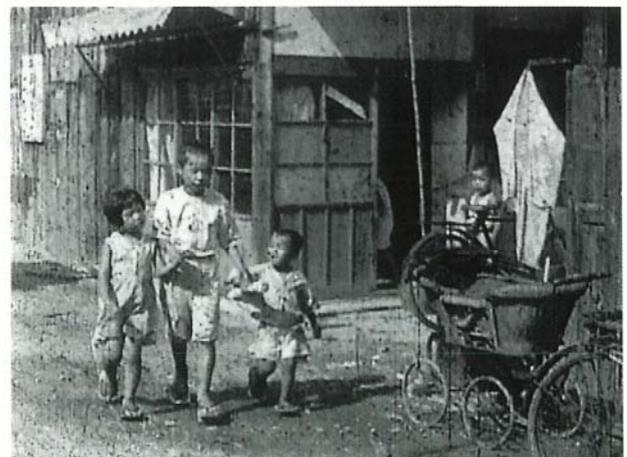
高瀬少年が、どの位の時期、高見町に居たのかも定かではない。近隣の人たちにとっても、間借りの者へはあまり関心を示さなかったこともあり、不況と戦争という非常時に際しては、同じような境遇の家庭も多く、映画や報道で話題になったとは言っても、それは一時のことで人々の噂も関心も時と共に薄れてしまう。

戦前には、隣組や檀家制度があり、住民台帳もあったであろうが、今日では戦災や洪水災害で紛失している。また役場にある住民票には、過去に人権に関わる差別的な記述があることから、今では閲覧することすらできない。このことも高瀬親子の消息をつかみ難しくしている理由でもある。

高見町辺りは、淀川の流れも対岸が霞す程に広大な川幅となって、すでに大阪湾かと思ふほどの河口地帯である。この湾岸地帯までやって来て、夕焼けの堤防に立ち、土手下に隣接した高見町の、高瀬少年が住んでいたらしい辺りを眺めながら、映画の風景とは全く様変わりした家々と、そこに住む人たちの移り変わりに接し、時間と空間の迷路の中で、迷子になってしまったような錯覚を覚えた。



高見町の描写。(映画「非常時涙の少年」の場面)



三人の子供たち。(同)

教職者の礎

四貫島小学校には、『僕らの弟』以前にも教職者と児童の物語があった。この物語は、芝居や映画、浪曲、講談になるほど有名なものであった。

大正12年(1923年)4月24日に起こった事件により、一人の教職者が殉職している。この出来事は、後々にまで語り継がれ、長く校庭に《森訓導の碑》という石碑として残されていた。

この物語というのは、森保太郎訓導が引率する修学旅行での出来事だった。四貫島小学校4年生男女児童220名は、主席訓導の矢野先生と森訓導以下6名に引率され、神戸へ修学旅行に出かけた。生田神社や楠公社を見学した後、一部分の児童は一般客と同乗で、阪神電車大阪線で帰路に付いたが、森訓導の監督するクラスは遅れて出発した。新淀川駅で下車した際、先発した児童の多くが南側にある軌道外の道路で待ち受けているのを見付け、児童の数名が電車が発車した直後に、向かいのプラットフォームを渡ろうと軌道内へ踏み込んだ。その瞬間に対向から来た大阪発の貨物電車で女子4名が跳ねとばされ、瀕死の重傷を負った。森訓導の「危ないッ」と制止する間もない出来事だった。

すぐに救急で近くの病院へ運ばれ、五昼夜の生死を彷徨い、治療の甲斐があつて、児童たちは一命を取り留めた。しかし、その間、責任感の強い森訓導は、不眠不休で付き添い。心身共に過労の極に達していた。

「この責任のすべては自分にある。私の不注意でこのようなことになり、父兄に対して申し訳ない。この責任は死をもってお詫びする他ない」と、次第に憔悴して、心身症のようになっていった。

児童の経過も良好というので、少しでも休養をとるようと皆に勧められて一旦帰宅したが、その足で西宮の自宅裏の阪神電車神戸行き電車に飛び込み自殺を遂げた。殉職であった。

これが映画になった。地元の映画会社である帝国キネマ演芸株式会社(通称、帝キネ)の芦屋撮影所第一回作品として、製作された『森訓導鉄路の露』である。

この帝キネの映画については、今回のテーマから外れるので言及しないが、小津安二郎監督の名作の『父ありき』も同じように修学旅行での事故に責任を感じ、一生教壇に立たなかった教職者の物語であったが、戦前の教師たちは聖職者と呼ばれ、その責任感の強さと、死を覚悟で教育に専念するという武士道にも似た精神によって、その聖職を全うしようとするところにあった。この森訓導殉職悲劇の追悼碑は校庭に残され、長く語り継がれるようになる。

映画『僕らの弟』や『非常時涙の少年』の題材となった教職者と児童のふれあいの事実は、新聞や映画で取り上げられた。その素地は、この森訓導の事件があったからではないか。

この殉職の事件から、十年の月日はそれほど遠い過去の出来事ではない。使命感や責任感の強い、この四貫島小学校の伝統が、報道などで取り上げられる素地になっていたに違いない。

この森訓導の物語に対して、『僕らの弟』の美談は、もちろん石碑もなく、学校の記録からも消えている。編纂された学校の沿革史にも、戦前の箇所が全く残されていない。この点については、幾度となく繰り返された淀川洪水による被害や、戦禍によって学校の資料類のほとんどが消失しており、戦前の沿革史そのものも散逸し、いつしか人々の記憶からも消されて行った。

もう一つ、沿革史が残されなかった理由として、戦後になり「…戦前の我々の教育は間違っていた。古い四貫島は今日をもって終わる。新しい四貫島の歴史は今から始まるのだ…」と、当時の教頭が、漸く戦禍にも残った数少ない過去の資料もすべてを焼却してしまった。それにより、人々の忘却と共に、四貫島の歴史の一つが消えていったのである。

赤茶けたフィルム缶

まさか60数年も経ってから、この古びた映画フィルムを探している者が現われるとは想像もされなかったに違いない。

紀先生のお宅を訪ねて一年ほどの月日過ぎた頃、もう

出てこない諦めかけていた時に、連絡が入った。映画『非常時涙の少年』のフィルム缶が見つかったという返事だった。

すぐに見つかるかと高を括っていたが、意外に時間が掛かってしまった。屋根裏か倉庫にあると思われていたものが、記憶の片隅に置き去られたように、何処を探しても出てこなかった。もしかして引っ越しや家財整理の間に処分したのかも知れないと、不安を募らせながらも、何度も何度も探して戴いたが、結局その時は見つからなかった。その間、紀先生や雪子夫人の体調の関係もあって、連絡も途絶え勝になっていた。

諦めかけた頃、別の用件で表の倉庫を整理されている時に大切に梱包されたフィルム缶が出てきた。16ミリ・リールに入った4巻のフィルム。包装された箱の中に入っていたために、初めは見過ごしてしまったものだった。

結局、見つかってみれば、焦らされているような具合で、『非常時涙の少年』という映画に、より興味を募らされる。この研究も、一年や二年の仕事ではない。気の遠くなるような、もしかすると徒労に終わる可能性がある地道な仕事だ。このテーマへの関心を如何に持続できるか。その試験を受けているようなものだったのかも知れない。

すぐに紀先生のお宅を訪ね、赤茶けたフィルム缶を前にして…『僕らの弟』の脚本を担当した師依田義賢との《師弟》というキーワードの元で推し進めてきたこの作業での、不思議な出会いと意外な展開に翻弄されているようで、これも運命のような印象を受ける。

この赤茶けたフィルム缶は、紀先生の失われて行く記憶と、永い歳月の間に風化した時代の移り変りを表わしている。紀先生にとっては青春の一コマであっても、他の者にとっては過去の幻影でしかない。そして、今ふたたび追憶と共に、失われた時間と時代に光をあたろうとしている。

この発見で最も幸運だったことは、フィルムはもちろんのこと、検閲台本と一緒に保管されていたことである。

検閲台本は、内務省警保局に提出するため、映像と寸分違わない内容が記されている。この内容によって、これまで探ってきた情報の断片の集まりが、線となり、面

となって、今明らかになって行く。

新聞に取り上げられた記事も、高瀬兄弟についても、また映画『僕らの弟』が、この事件をモデルとして、どのように脚色されているのかも、すべてが氷解されて行く。

装丁は厚紙で補強されているが、中の用紙は破れそうな薄紙で、恐る恐るページをめくる。

「内務省認可證。台帳番号第51号。非常時涙の少年。全4巻。大阪毎日新聞社」

次のページにも「非常時涙の少年。全4巻。参六五米」と、検閲活の印が捺されている。その印には「内務省。H第12,400号。検閲済。有効期間、自昭和8年11月14日、至昭和11年11月13日」の、検閲時報の登録番号や、その認可期間まで詳細に示されている。

そして、検閲台本の《梗概》の冒頭に、「この映画は実際にあった事を実際の人々をもって劇的に編輯したものです」と前置きされている。

この『非常時涙の少年』の映像に、若い日の紀先生や高瀬房一兄弟の姿を留めている。すでに、この物語の内容は、映画『僕らの弟』の中で、明らかになっているが、劇映画には脚色が施されている。だから、重複する箇所もあるが、実際の内容を知るためにも、ここで《梗概》を示しておく必要がある。

「…大阪市四貫島小学校六年生高瀬房一少年が、貧しい中に妹ふさ子さん（同校三年生）、今年六ッの信一君を、母なき家の母となって、一切の世話をし、お父さんが恵まれない、その日稼ぎのために家庭にあって仕事が出来ぬ処から、常に留守勝で房一君も学校を休まねばならぬ事情にあった。受持訓導の紀積先生は、生徒の身の上を案じて、その家庭を訪ね、房一君から、その事情を訴えられ、共に泣いたが、紀先生と校長先生の計らいで、弟信一君を連れ登校するようになった」

さらに重要な記述は、この出来事が昭和8年7月11日の大阪毎日新聞紙上に発表されたことが示されている。

《梗概》には、さらに「…各方面から、この感心な少年へ同情があつまりました。房一少年をめぐる人々は、この夥しい同情に対する「人の情に報ゆる会」を催して、世の同情者に感謝の意を表すと共に房一君親子も励まし

合って、今では朗らかに勤め励んでいる」と結んでいる。

「人の情に報ゆる会」を催すなど、映画『僕らの弟』とは、全く別の展開を見せている。

この検閲台本を頼りに、毎日新聞大阪本社を訪ねて、資料調査室の片隅で、大阪毎日新聞の古いマイクロ・フィルムを手繰りながら、当時の記事を検索することになった。

教室に幼弟抱いて

昭和8年7月11日の夕刊、大阪毎日新聞の記事は《教室に幼弟抱いて、非常時、涙の少年》という大見出しになっていた。「母なき家の〈母〉となって、学校から帰れば飯たき」というサブ・タイトルも付けられている。

この記事を書いたのは、橋本伸治記者。当時29歳の社会部の橋本記者は、四貫島小学校を訪ね、直接紀先生から高瀬少年の話聞き、すぐ記事にした。

この記事の見出しが、《非常時、涙の少年》であった。二面のトップの大見出しであった。

「…学校では、弟を傍らに子守しながらの勉強、帰れば一家の〈母〉となって、すすぎ洗濯から御飯たきまでする非常時少年——大阪此花区四貫島小学校尋常科六年生二組生徒、西淀川区高見町2-82、仕上工高瀬茂平氏(35)の長男房一君(13)は、昨年来学校を欠席勝なので、ある日受持紀訓導が房一君を一室に招いて事情を聞く

家では父と、妹の同校三年生五の組ふさ子さん(九つ)と弟信一君(六つ)の弟妹があり、母あき子さんは信一君を生んで間もなく病死し、再三父は失業し、ある時は他国の土工部屋に出稼ぎに出て留守勝なので、小さい弟を置いて学校に来ては、心配になって、勉強もろくろく出来ないから休んでいますと涙ばなしをしたので、同訓導はいたく同情し、相抱いてともに泣いたが、訓導から〈弟を学校に連れて来て勉強しなさい〉と、許されて同君は、新しい光を得、その後毎日弟をおんぶして登校し、先生のはからいで、特別小さい机を信一君に与えられ、兄弟仲良く机をならべて勉強し、その後成績もよくなり、弟も先生と仲良しにな

教室に幼弟抱いて

非常時、涙の少年

母なき家の『母』となつて

学校から帰れば飯たき

學校では、弟を傍らに子守しながらの勉強、帰れば一家の「母」となつて、すすぎ洗濯から御飯たきまでする非常時少年——大阪此花区四貫島小学校尋常科六年生二組生徒、西淀川区高見町二ノ八二、仕上工高瀬茂平氏(三十五)の長男房一君(十三)は、昨年来學校を欠席勝なので、ある日受持紀訓導が房一君を一室に招いて事情を聞く

家では父と、妹の同校三年生五の組ふさ子さん(九つ)と弟信一君(六つ)の弟妹があり、母あき子さんは信一君を生んで間もなく病死し、再三父は失業し、ある時は他国の土工部屋に出稼ぎに出て留守勝なので、小さい弟を置いて學校に来ては、心配になって、勉強もろくろく出来ないから休んでいますと涙ばなしをしたので、同訓導はいたく同情し、相抱いてともに泣いたが、訓導から「弟を學校に連れて来て勉強しなさい」と許されて同君は、新しい光を得、その後毎日弟をおんぶして登校し、先生のはからいで、特別小さい机を信一君に与えられ、兄弟仲良く机をならべて勉強し、その後成績もよくなり、弟も先生と仲良しにな

で間もなく病死し再三父は失業し、ある時は他国の土工部屋に出稼ぎに出て留守勝なので、小さい弟を置いて學校に来ては、心配になって、勉強もろくろく出来ないから休んでいますと涙ばなしをしたので、同訓導はいたく同情し、相抱いてともに泣いたが、訓導から「弟を學校に連れて来て勉強しなさい」と許されて同君は、新しい光を得、その後毎日弟をおんぶして登校し、先生のはからいで、特別小さい机を信一君に与えられ、兄弟仲良く机をならべて勉強し、その後成績もよくなり、弟も先生と仲良しにな



君一信の弟が左君一房が右てつ向

大阪毎日新聞、昭和8年7月11日夕刊の記事。

り、五十五人の同級生も《可愛い吾等の弟》といたはり、美しい兄弟の情愛を見せ、学校当局から再三給食をすすめるが〈家で御飯をたいて参りました〉と一切辞退して

いる、十日朝、勉強中の房一君兄弟を訪ねると、語ることも出来ず涙とともに打伏してしまった。…」

この初めての記事だけでも、映画『僕らの弟』と『非常時涙の少年』の骨子が分かる。タイトルとなる『僕らの弟』も、ここでは《吾等の弟》と示されており、明らかにこの記事から発想されたものと理解できる。

驚くべきことは、この記事の反響である。翌7月12日の紙面にも、《人情変わらず…つづく美談“非常時涙の少年”兄弟に、涙誘う同情が二つ》との大見出し。

前日の記事を読んだ青年が、天満署に立ち寄り、名も告げず、「高瀬兄弟に渡してくれ」と一通の封書を差出したという。この封筒には、金二円と手紙入っており、その手紙の内容は、「房一君、毎日新聞を読んで、君の立派な行いに感心した、僕も母を知らずに育った男だ、苦勞をいとわず働こう、きっと先では幸福が待っている、同封の金は僅かだが弟妹になにか買ってあげてくれ」と記されていた。

もう一つは、七歳の子供がお父さんに読んで貰った夕刊の内容に感動し、節約して貯めた貯金を受持訓導の手元まで差し出したというもの。新聞記事の反響の大きさを告げるものとして紹介している。

10日後の7月21日の紙面には、《非常時・涙の少年…映画になる。『僕らの弟』本紙記事に日活も感動》。

「『僕らの弟』—それは母なき家の母となって、濯ぎもすればご飯も炊き、幼き弟を抱えて勉学にいそしむ大阪此花区四貫島小学校六年生、高瀬房一君(13)の健気な姿を《非常時涙の少年》と題して、7月11日付本紙夕刊に報道して以来、およそ学校通いの子供のいるほどの家庭から家庭へ、はてしない感動の波紋をなげ、数多の同情金も贈られているが、日活でも本紙記事を見て感激し、高瀬家を慰問する一方、校長先生や受持訓導らの賛援のもとに、この模範的美談を映画化して、広く天下に伝えることとなった。24日ごろ同小学校のロケを皮切りにして、依田義賢氏脚色の『僕らの弟』は、春原監督指揮で太秦撮影所のスター南部章三氏の訓導、中村英雄君(13)の高瀬少年など、六巻約五千尺となって、8月10日で完成、新秋9月封切りされることになっている。…」

さらに、その4日後の7月25日の紙面には、大阪毎日

新聞自身が映画化を発表している。

《母なき家の〈母〉、涙の少年のロケーション》

「…幼弟を抱いた非常時涙の少年—此花区四貫島小学校尋常科六年生二組生徒、高瀬房一君(13)の美談が本紙に報ぜられるや、各方面から多大の物質的、精神的の温かい同情が寄せられ、本社活映部では、『母なき家の〈母〉』と題し、これを映画化すべく、何処までも写実本位で、24日同校で高瀬君兄弟を主演として、同校職員、全生徒が、これに参加し、ロケーションを行なった、実写を劇構成として映画化するのは、これが最初の試みであること(写真は、涙の少年高瀬君兄弟が学校の泰安庫に最敬礼をしているロケーション)」

この映画『非常時涙の少年』が、当初は『母なき家の母』でスタートした。四貫島小学校の同窓会の人たちの多くが、『母なき家の母』という題名を示したことは、決して間違ったことではなかった。

さらに、8月2日紙面《母なき家の母、レコードに。「太平」で吹込み》の見出し。

「…母なき家の〈母〉となり、幼弟を抱いて勉学する可憐な少年—大阪西淀川区高見町2ノ82、高瀬茂平氏の長男四貫島小学校六年生房一君(13)の記事が、去月11日本紙に報道されるや、果然社会の同情が集まり、本社活映部が映画化に着手したのを初め、日活でも映画を作成、近く上映することになっているが、こんどは西宮の太平レコード会社でレコード・ドラマに吹込み、日活が上映するころ売出そうとしている。」

小さな善意が、報道によって解き放たれ、次第に大きな事件のように波紋を広げていった。一つの新聞記事が映画になり、レコードになる。周りの人たちは、その反響の大きさに、《人の情に報いる会》を催す。まだ、テレビのない時代。新聞や映画などの報道は、今日の《ワイド・ショー》のような過熱ぶりだったのだろう。この目紛るしく変化する状況の中で、高瀬房一親子は、戸惑いを隠せなかったに違いない。それが善意で始まったことだけに、高瀬少年の肩には、その同情に報いるという使命感や責任感が重くのしかかっていたのではなかったか。…



紀積訓導（映画「非常時涙の少年」の一場面）



弟を連れて登校する房一。（同）

大阪毎日新聞社活映部

平成7年（1995年）、戦後50年を機に、新聞を中心とした報道メディア自身が、如何に戦争へ加担して行ったのか、自戒を込めた特集が組まれていた。特に毎日新聞社は、皇室とのつながりも深く、御用新聞とも呼ばれただけに、メディアの戦争責任については真摯に受けとめていた。

しかし、膨大な量のニュース映画や記録映画を生産していた映像部門《活映部》については、そのフィルム資料の散逸と共に、あまり詳しく示されているものはなかった。

このような毎日新聞社史の、映画部門に関する記載が少ないことが、映画「非常時涙の少年」についての調査を困難にしている主な原因だった。昭和27年（1952年）に発行された「毎日新聞七十年」にも年表の片隅に活動写真班の創設などについて簡単に触れているが、映画部門や活映部についての記載はなかった。戦後まなしと言うことで、戦前の映像メディアについての問題に目を瞑ろうとした訳ではないと思うが、膨大な量の映画フィルムと共に、《活映部》と呼ばれた映像部門についての記録も消えてしまっていた。

ここでは社史などの資料の中から、数少ない映画部門についての記述をまとめてみる。

大阪毎日新聞社が、初めて活動写真班を組織したのは、明治41年（1907年）9月。紙齢9千号に達したのを記念

して、大阪本社に《活動写真班》が創設された。さらに、明治44年（1911年）6月、紙齢1万号に達した記念事業として、東京支店（東京日日新聞）に《活動写真第二班》を新設している。

明治41年というのは、牧野省三が京都の横田商会（横田永之助）に依頼され、初めて「本能寺合戦」という劇映画を撮影した年である。映画が渡来してまだ10年そこそこの頃。大正元年（1912年）になって、ようやく横田商会と東京の吉沢商会、福宝堂、M・パテーの4社が合併して日本活動写真株式会社（日活）が創設された。

このことを見ても、大阪毎日新聞が如何に早い時期から映画に関心を持ち、映画フィルムを活用することに積極的であったかを示すものである。

当時はまだ映画館もなく、巡業の形で映画を上映していた。この活動写真班は、劇映画と同じように活弁と呼ぶ映画解説者と映写技師、助手兼雑役夫を合わせ、1班7、8人ほどの編成で、全国を廻っての上映活動を行っていた。（東京だけでも15班体制であったという）

この活動写真班が、社会的に大きな評価を得るようになったのは、大正9年（1920年）に全国的巡回映写による国勢調査の事前PRを提案。この効果により、日本初の国勢調査が世界各地から注目される程の好成績をおさめることになった。

日本でニュース映画が認められるようになったのも、毎日新聞社における映画活動による。事件の立体的報道を目指して、大正6年（1917年）にフィルム通信という《日刊フィルム・ニュース》が製作発行された。これは、

やや時期尚早の観があって、すぐに中断されたが、大正13年(1924年)に《大毎キネマニュース》となって実現する。この頃が大阪毎日・東京日日ともに製作活動も活発で、特に関東大震災などの貴重な記録フィルムを全国的に速報公開した。

この頃から朝日新聞をはじめ各新聞、映画会社の間でニュース映像や記録映画の効用が注目され、盛んに映画が製作されるようになる。特に、大正13年の皇太子裕仁殿下と久邇宮良子女王殿下のご成婚のニュース上映では、毎日対朝日というライバル同士が火花を散らす速報合戦を演じたと記されている。

映画「非常時涙の少年」に関わる映画教育面では、昭和2年(1927年)大阪毎日新聞社を母体として、《大毎フィルム・ライブラリー》を設立。16ミリ・フィルムによる一般普及に努めた。今回発見されたフィルムも、このライブラリーの本一であった。

この《大毎フィルム・ライブラリー》に関して、《毎日新聞100年史》の中から引用してみる。

「…これは創設以来、大毎東日の活動写真班が製作、購入した千巻を越えるニュース映画、短篇フィルムを積極的に社会のために活用しようという目的で、当時の映画班の水野新幸主任によって起案されたものだ。本社では、このライブラリーを基盤に、当時まだ草創期にあった映画教育の全国的統一団体として、昭和3年には《全日本活映教育研究会》が発足した。この《全活教》の会長には本山大毎社長が選任されたが、中央・地方官庁にフィルムの配給機関を設けること、市町村に映写機を購入、学校教育に積極的に利用させることなど、当時としては先覚的な意見書を文部省に提出、またその実践機関として全国の小中学校を対象に、学校巡回映画連盟を結成するなど、映画教育の普及発達に大きな力となった。また、昭和9年にはこの《全活教》は《全日本映画教育研究会》と改称する。…」

活動写真班が廃止され、昭和7年に《活映部》となり、昭和13年には《映画部》となる。「東日・大毎ニュース」は、全国千六百館の映画館で上映された。その後、激動する国際情勢も取り入れ、外国通信社と提携、「東日・大毎国際ニュース」と改称したが、昭和15年(1940年)、

戦時国策により、大毎・東日は、朝日、読売、同盟と共に、この4社が統合され、社団法人日本ニュース映画社が創立され、文化映画や教育映画を残し、ニュース映画の製作は途絶える。

戦後の昭和30年(1955年)の毎日映画社の創設まで、毎日新聞の映画部門の活動は停止することになるが、この伝統ある大阪毎日新聞が製作してきた膨大な量の映画のフィルムが今日、全く保存されていない。劇映画における日本映画の問題だけでなく、ニュースや時事映画、文化映画、記録映画といった映画フィルムの保存の問題は、やはり目を逸らす訳には行かない。

銀幕にすすり泣き

大阪毎日新聞社と東京日日新聞社合同で、映画雑誌《活映》(月刊誌)も出版していた。毎日新聞大阪本社の社史編纂室には、この《活映》の合本誌が残されている。この社史編纂室で教えられたことは《活映部》は販売部門に属し、活字メディアと一線を画していた。だから、社史の中でも《毎日新聞販売史》に記されているという。

大阪毎日新聞社活映部販売の月刊誌《活映》の、昭和8年9月発行の第67号には、映画『非常時涙の少年』の特集が組まれていた。

《大阪四貫島小学校に咲いた美しき人生愛、母なき家の〈母〉。純記録の型をかりて劇活映として撮影》の見出しの後、

「…大毎本紙7月11日付夕刊、《教室に相抱く兄弟、母なき家の〈母〉》とトップを切って報道された大阪市此花区四貫島小学校尋六二組生徒、西淀川区高見町2ノ82、仕上工の高瀬茂平氏、長男房一君(13)と受持紀訓導との間に起こった美しい愛と涙の物語りは、その後各方面の注目をひいていたが、日活では『僕らの弟』と題して、その撮影を開始したが、本紙活映部では、『蘇我入鹿』『親のない小鳥』等を製作した長橋達夫氏をして、『母なき家の〈母〉』と題して製作を開始した。…」という前置きの後、

「…これは、従来のいわゆる俳優を使つての、劇という形式は全然用いず、総てを写実で行く、新しい試みが

行なわれている。実在の本人、実際の家、街、学校、教師、生徒、授業等々、しかも、その人物に殊更の動きを要求せず、出来るだけ自然の姿そのものを尊重して、実写から組立てられた劇を構成するものである。…」

次号の《活映》10月号(第68号)には、より詳しく記されている。

「…活映化したことは前号ですでに紹介したが、今般これが『非常時涙の少年』と題された。(中略)この活映で、特に注意しなければならないことは、劇中の人物がすべて実在の人々であり、一人も俳優を用いないで製作したという点である。人物から家まで、その他あらゆる点で作為したものは一つもなく、自然のままに描出されたということは、劇活映としては、空前のことであろう。素人だけに、芝居をしない。それだけに多少ギョチナサもあろうが、俳優には現わせない真実味は、決して見逃し得ないものである。つまり、切々として、われわれに訴えて来る迫力、これこそは、この活映の持っている他のもののおよび得ない強味である。なお高瀬君の弟が、無邪気ないろいろな面白い場面を見せて、全体を明るくさせている点も、また捨て難い味である。…」

ここで、注目すべきことは、現実の人々が登場しての再現ドラマを記録映画の新しい形態として評価していることである。

記録映画については、ベルリン・オリンピックを記録した『民族の祭典』(1938年・ドイツ、監督：レニ・リーフェンシュタール)の棒高跳びのシーンが夜間になり、照明の準備が間に合わず、翌日再現撮影された例がある。また、『東京オリンピック』では、《記録か芸術か》で問題になった聖火リレーの場面で、実際に走らない所を走らせ、映像にしていた。

記録映画は、ニュース映画ではない。事実を記録することの意義は、見ることの出来ない人たちに映像として伝えることにあ

る。そのためには、再現しても構わないという認識も成り立つ。現実には、上記の例がそれにあたる。今日では、《やらせ》と批判され兼ねない映像も、当時は再現して実際の出来事を伝えることの方を優先した。この認識において、『非常時涙の少年』は先駆的意義があった。

本題に戻る。

上映会に関しても、同号に示されている。《昼夜三回六千の観衆に、四貫島校で、高瀬一家も銀幕にすすり泣く》と題して、

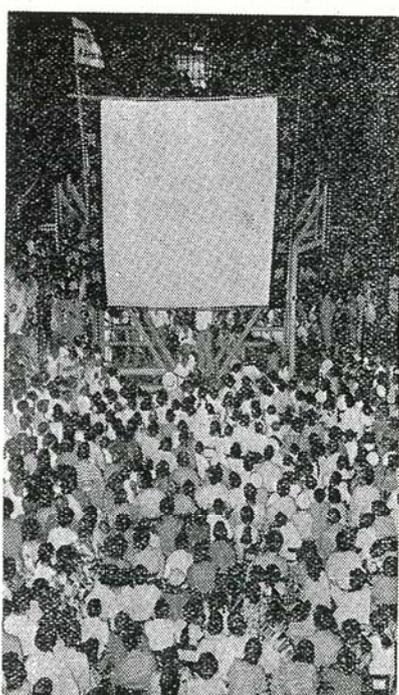
「…9月14日、この事件の起こった大阪此花区四貫島小学校において全校児童、父兄一般に公開し、非常な盛

もつて光栄を浴べた
「親のない小島四貫」海の桃太
部(二巻) 體育部「一巻」
門司支部 全日本活映教
育研究所門司
支部では毎月
三十一日午後八時から門司市丸山等
常備小學校講堂で定例「活映の

『非常時涙の少年』

感涙の渦高く巻き
起り試寫會の盛況

大阪道頓堀日産で
京阪神名工招待
本紙十一日夕刊によつて報じら
れた大阪四貫島小學校非常少年生
高瀬君一君と受持記者をめぐる
美しい涙の物語を本社記者部で直
ちにこれが活映化を志し、人物そ
の他すべて實在のもの、ありま
の姿をもつて活映「非常時涙の
少年」を製作したことは既報の通
りであるが、これが百股公開に先
つて九月十三日午前九時半より大
阪道頓堀日産において、本社内
全日本活映教育研究所主催のもと
に市内小學校校長ならびに教育關
係者六百名を招待、試寫會を行つ
た。午前九時開、早くも來會者を
迎へ、定期より水野活映部長の挨拶



四貫島小學校に於ける非常時涙少年の試寫會

夕を開いた。研究會員、同家族
二百名を擁集、岩本常任委員の挨拶
の辭についで、伊藤九州支店員の
「喜劇について」と題する一編の説
明あり、「コック」大會として本
社フィルム・ロイヤル・ブライ・提供の
喜劇キートンの西部成金その他
數巻映寫、一同お新の留聲をき
て時のたつのを忘れた。午後十時
半散會。
つた大阪此花区四貫島小學校にお
いて全校児童、父兄一般に公開し
非常な盛況であつた。當日は午後
一時講堂において、一年より四年生
で「國語」を併映、午後三時開
講堂で五年生、高年まで十年期
の同校での出来事、「森田君の勇
と併映、この高年生映寫の際には
森田君と親友であつた森田先生の
姿が見せられた。十年前にす
に遠い幻となつてゐた友の面影を
今生きた友として感動に見て深い
感涙にひたつてゐた。なほ「非常
時涙の少年」映寫に際しては、そ
の當人である高瀬君一少年が流傳
「君もつてスタジオ」に入つ
てゐた。畫面が進むにつれて觀衆
の涙にそそられてか、當時の有様

暗渠排水工事を フィルムで關係者を指導

日本のトルクシラ?
アルプスの樂園
自來水紹介が目的
山のシエズン山は到るところ
鐵道省でまたも
同切木村(田野尾)に七年既施行
れた暗渠排水工事は同工事として
全国的暗渠排水工事は同業者折紙
をつけ、福留下一(一所)の同工事
と二線にまたに農林省から工事費
全額を、一巻のフィルムに収められ
全国的に「自給の身を助けたが
佐賀縣耕種課では今回そのフィルム
Mを借手し、同省出部で映寫し
たのを手始めに、縣下同地方の
希望により映寫してお手本とし、
暗渠排水工事を指導することを
なつた。

四貫島小學校に於ける非常時涙少年の試寫會

況であった。当日は午後1時講堂において一年より四年まで『体育デー』と併映、午後三時同講堂で五年より高二まで、十年前の同校での出来事『森訓導の殉職』と併映、この高学年映写の際には森訓導と親友であった、桑田先生の姿が見受けられた。十年前に、すでに遠い幻となっていた友の面影を、今生きた姿として眼前に見て、深い感慨にひたっていた。なお『非常時涙の少年』の映写に際しては、その当人である高瀬房一少年が弟信一君をつれてスクリーンに見入っていた。画面が進むにつれて、観衆の涙にさそわれてか、当時の有様が思い浮かべられてか、しきりと熱い涙に体をふるわせていた。午後七時半からは、校庭で父兄会に映写、観衆約五千名、さすがの同校も溢るる有様であった。この時高瀬茂平氏は、子供をつれて同校二階映写機の側らで、深い感銘とともに鑑賞していた。昼夜三回、まれにみる意義深い映写会は、同夜九時半、盛況裡に閉会した。…」

人の情に報ゆる会

この論文では、フィルム復元の技術的な作業については触れないが、映画『非常時涙の少年』が発見されたことで、劇映画『僕らの弟』との内容に関しては比較しておく必要がある。記録映画と劇映画の相違だけでなく、その後の反響やメディアの影響についても、この二本の映画を比較検討することは重要な意味をもつ。

まずは、大阪毎日新聞社製作の映画『非常時涙の少年』についてのあらましを紹介しておく。

4巻構成になっており、冒頭のタイトル部が欠落しているが、ほぼ完全な形で保有されている。

《第一巻》

新聞記事を書いた橋本記者が、四貫島小学校を訪ね、高瀬少年の美談を映画化したい旨、校長や担任に依頼するところから始まる。

「…是非とも、御校の教育精神をそのままに、その児童を中心として、すべて偽りのない事実のみで表現したいと思います…この新しい試みはシネマ界空前の企てでありますから、完成の暁は一つのエポックをつくるものと確信いたします」

登場する人たちのタイトルの後、紀先生の回想の形で、これまでの経緯を紹介している。

高瀬房一の出席表。欠席が続き、生徒たちに尋ねても、誰も知った者がいない。

これまでも、房一の欠席のために、出席歩合が他の組と比較され、最劣等となってしまう。生徒たちも、自治会の議題にすることが提案される。

《第二巻》

ある日、房一を呼び出すがすぐに帰ってしまう有様で、紀先生はあまりにも気になるので、彼の家を訪ねることになる。

不良なのか、怠惰者なのか。

実際のところを聞くと、五年前に母は信一を生んですぐに亡くなり、父親は朝の五時に起きて工場へ行ってしまいうためにいつも留守勝で、小さな弟の世話を見てやる者がいない。この五年間、三人きりでやってきた。ある時などは、出稼ぎ先の四国で父が倒れ、旅費の工面を頼るほどだったと、涙ながらに訴える。

《第三巻》

校長も同情し、許可を得て、房一は弟を連れての登校が始まる。小さな机を並べての勉強。信一も、クラスの中に溶け込み、組の出席歩合でも一等になる。

《第四巻》

これが新聞記事になる。その反響。寄付や励ましの手紙など。この世間の夥しい同情に対して、《人の情けに報ゆる会》が催されることになる。校長の挨拶、紀先生の感想、高瀬茂平氏の謝辞、橋本記者の感想の後、生徒たちによるヴァイオリンの演奏や舞踊遊戯で、房一家族を励ます。

ラストは、母の位牌を前にして、家族が一緒に…

父「…房一、皆さんのお情けに対して、わしも一生懸命に働く、お前も勉強して立派な人になるよう心がけてくれ」

房一「きっと勉強して、お父さんにも安心して戴くようにするよ…」の字幕で終わる。

このように大阪毎日新聞社の映画『非常時涙の少年』の詳細をみると、演技のない自然な振る舞いであるとしても、何故か高瀬少年に当惑したような表情を読み取れ

てしまうのは、単に私の先入観の所為だろうか。撮影での緊張だけではなく、何気ない表情の中にも、そのような印象を受けてしまう。

この『非常時涙の少年』に対して、日活の劇映画とを比較してみると、日活の『僕らの弟』は劇的に再構成し、脚色されていることがよく分かる。

次に映画『僕らの弟』の内容も簡単に要約しておく。

四貫島小学校から始まる。夏休みを前にして、教室では休み中の注意の後、プレゼントとして海水浴のための割引のチケットが配られる。が、房一だけは辞退する。

二階借りの家では、病床の母と失業の父。ふさ子は友達も行くのに、自分たちも海水浴に連れて行ってくれとせがんでいる。落ち込む父に、母は痩せた指から指輪を外し、これで、気晴らしに子供たちを連れて行くようにと勧める。

海辺での一時、父も子供たちも日々を忘れたようにはしゃぐ。その間に、母の病態が急変し、死去してしまう。

父は、条件の悪い四国への出稼ぎに出ることになる。埠頭まで父を見送る三人の兄弟の前に、過酷な現実が待っている。

洗濯や炊事だけでなく、弟が腹をこわせば、すぐに家に戻り、その世話に追われる日々が続く。

休み勝になる房一を心配して、紀先生が訪ねる。事情を知って、紀先生は校長を説得して、高瀬兄弟が小さな机を並べ、登校できるようになる。

体育の時間や図工の時間、掃除の時間にも、信一はクラスに溶け込み「僕らの弟」と可愛がられる。

ある日、父からの手紙が来る。争議に加え、病気にもなり、帰る旅費もなく困っていると、逆に父の方から仕送りを頼む始末である。

三人の兄弟は、友達の親にも頼み、豆腐の行商をしたり、街頭に出て新聞を販売したりして旅費を集める。ようやく、父が帰れると分かった日、それを知らせに兄を呼びに出掛けた弟は迷子になってしまう。みんなが手分けして探す、なかなか見つからない。

そのような経緯があって、埠頭で父を出迎えた時、三人は歓喜して駆け寄る。この家族の再会に、紀先生も父の職を見付け、家族に希望の光が見えるところでドラマ

は終わる。

この二本の映画を比較して見ると、『僕らの弟』の方が、劇的で感動的な構成になっている。

依田の「近所の子の話」という、豆腐売りをする子供たちのエピソードも加え、劇的な構成を試みている。

やはり、実際の人々の出演する映画では、様々な支障が出てきたのではなかったか。

劇映画『僕らの弟』に《非常時涙の少年》の副題が付けられ、その後も各方面から申請され、プリントを重ねられて行ったのには、ドラマとしての抽象性によって、普遍的な広がりを見せていったからであろう。

その活用の展開は別にしても、紀先生の児童への同情や、橋本記者や近隣の人々の励まし、また社会的な主張をもって描こうとした依田や春原の意図とは関係なく、現実から離れて、映画は《非常時の時代》を一人歩きして行く。人の感情や生活を無視して、俄に脚光を浴びた少年たちの当惑を誰が受けとめたのだろう。その後の、彼らの生活を報告した新聞の記事は結局見付けることは出来なかった。

牛歩の十年、まとめにかえて

映画『僕らの弟』の存在を知り、復元に携わるようになって、すでに十年の歳月が過ぎている。十年一昔と言うが、この十年の間には、様々な出来事があった。シナリオを担当した師依田義賢だけでなく、監督の春原政久も1997年(平成9年)に、すでに幽冥を異にしている。そして、映画のモデルとなった紀積先生も、昨年(平成10年)の暮れに逝去された。享年九十八歳。大往生と言える。

紀先生は、この映画のモデルというだけでなく、非常時と呼ばれた時代から、戦後の混乱期に至る苦難の時代を、教職一筋に歩んだ生き証人であった。

軍国時代、教職者は社会の模範であり、聖職と自らを納得させようとも、所詮は殺戮である戦争を前にして、神国のためと説き、多くの教え子たちを戦地へ送って行った。これは、たいへんなジレンマであり、苦悩をなくして遂行できない行為であった。

戦後は、戦前の教育に対する全面的な否定を余儀なくされ、戦争責任の追及から人格をも無視され、生活苦や自信の喪失、自己否定の中から新たな戦後教育を再出発しなければならなかった。

もちろん、これは日本人すべての人びとが辿った道であり、この映画や作者たちとして、同じ事情にあった。しかし、教職者であるというだけで、映画人よりも遥かに険しい茨の道であった筈である。このような苦難の道を教職者として貫かせたものは、自らの行いが正義であるという信念に他ならない。

この論考の題名を『非常時の少年たち』と名付けた理由は、これらの映画に登場した少年たちだけでなく、作者も含め、非常時と呼ばれた時代に翻弄された人たち、《時代の子供たち》として言及しようという意図からであった。

しかし今、この目的を完遂することが出来ない。報道や映像メディアの問題、教育の問題、映画が作者から離れ、ひとり歩きする点でも消化不良のままに終わらなければならない。歳月は資料の散逸だけでなく、証言者をなくし、人の記憶も風化させる。所詮、消えた歳月の中では、これらの回答を引き出すことは無理な望みかもしれない。

特に、《非常時の少年たち》、この鍵を握っているのは高瀬少年たちである。しかし、その消息は未だにつかめていない。… (了)

追記：

この論文の校正の間にも、京都府京都文化博物館映像ホールにおいて、映画「僕らの弟」が公開上映されることになった。8月14日、終戦記念日の前日、夏休み特集「時代を映す子供の瞳」の一本として企画されたものである。特に今回は、活弁（活動弁士）つきの特別上映。復元後初めての公開でもあり、“60年ぶりの復元上映” “非常時の世相色濃く” “戦争前夜の不況時代の子供たち” “ほんろうされた世代の困惑” …と、幾つかの新聞やテレビで取り上げて戴いた。

この映画の上映には、弟役の吉村五男さんをはじめ、フィルム発見者である西山高等学校の小松明先生、此花の郷土史研究会の高橋弘さんなど、関係者にも駆付けて戴き、盛況な催しとなった。

場内から啜り泣きが聞かれた時は、復元に携わった者として感慨深いものがあつた。60年という歳月を生き延びた映画が、時代を越え、人々に与えた感動をみる時、映像の持つ影響力の大きさを知りつつも、改めて映像の重要性を再確認することになった。

この機会をお借りして、復元調査にご助力戴いた皆様に謝意を表したいと思います。特に春原政久監督、依田義賢先生、紀積先生のご冥福をお祈りすると共に、お力添え戴いたご家族の方々、特に紀雪子夫人、保先生、晶子さん、吉村五男さん、泰典先生、小松明先生、四貫島小学校同窓会の安田昭逸さん、高橋弘さん、毎日新聞大阪本社、京都府京都文化博物館の皆様には、一方ならぬお世話になりました。皆様のご支援とご厚情に対して、厚く御礼申し上げます。